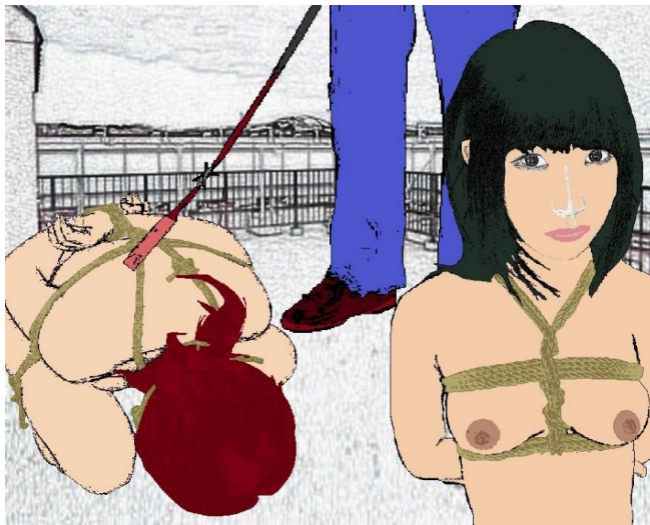


Family SM triangle

Side: Love & Papa & Mama



Horikado Nagayasu

目次

- 1. Side Love ガールズトーク-4-
- 1. Side Papa マンネリプレイ-16-
- 1. Side Mama 限界ぎりぎり-45-
- 2. Side Love メール調教.....-77-
- 2. Side Papa メール調教.....-91-
- 2. Side Mama 娘への疑惑.....-99-
- 3. Side Love 課題に再挑戦.....-106-
- 3. Side Papa マゾ娘の正体.....-113-
- 3. Side Mama 露出フィットネス.....-121-
- 4. Side Love 輪ゴムふんどしと縄ふんどし-129-
- 4. Side Papa 禪あれこれ.....-155-
- 4. Side Mama わたしの播粉木縄禪.....-176-
- 5. Side Love 針責めに挑戦.....-202-
- 5. Side Papa 本気の調教.....-219-
- 5. Side Mama 娘の縄禪と輪ゴム禪.....-236-
- 6. Side Love ご主人様の正体.....-243-
- 6. Side Papa リアル調教.....-323-
- 6. Side Mama パパの忘れ物.....-399-
- 7. Side Love 屋外全裸トレーニング.....-410-
- 7. Side Papa 屋外調教.....-448-
- 7. Side Mama アルバイト.....-483-
- 8. Side Love 遊園地.....-528-

8. Side Papa遊園地.....	-547 -
8. Side Mama遊園地.....	-565 -
9. Side Love三角関係（ママはS？）	-584 -
9. Side Papa三角関係の始まり.....	-610 -
9. Side Mama父母娘で三角関係！？.....	-633 -
後書き.....	-675 -

体験版の目次はダミーです。しおりによるジャンプ機能はありません。

1. Side Love ガールズトーク

「うっわー、巨乳！」

「なことない。Cカップだもん」

「嘘だよ。Dはあるって。ミッチンもそう思うでしょ」

「Bカップに同意を求めるな」

あたしだって、あと2cmあればCデビューだ。たった2cm。されど、20mm。

「それよかさ、メグのそこ。剃ってんの？」

ラブこと都賀山愛梨沙つがやまありさに指摘されてみると、なるほど、メグこと平恵たいらめぐみのアンダーヘアはきれいなハート形になってる。

「だってさ。いざってときにモジャモジャだと、ドン引かれるかも」

「バージンがそんなことしてるほうが、ドン引かれるわよ」

「そんな可愛い——ええと、なんていうんだっけ。絹草？ 絹草みたいなラブだったら、ナチュラルっててもいいよ」

「これはこれで、コンプレックスなんだから。ミッチンくらいが、ちょうどいいよ」

「そだね。ミツちんは平均値だもんね。でもBカップかあ」

「なにが言いたい！」

「だから。仲良し^{ワンツースリー}123だけじゃなくて、仲良しBCDになったってこと。アンダーヘアまで3人グラデーションだし」

「そいえば、『こいわ・ふつう・うすい』って電車の写真あったね」

「なに、それ？」

「ん。小岩って駅の看板と普通電車の行先表示の臼井とがまとめて写ってる写真。前にネットで盛り上がったんだよ」

女3人寄ったら姦しいっていうけど、ほんと。これだけおしゃべりしてて、まだ誰もバスに浸かってない。まあ、ユニットバスに3人一緒に入ったら、けしからぬことになりそうだけど。

あ、さっきの123ってのは、名前のこと。

Dカップ疑惑の都賀山愛梨沙は、苗字も名前も3文字。ハート処理の平恵は1文字ずつ。そして平均値だけどBカップ（ほっとけ）のあたしは^{ながほり み あ}長堀弥愛。苗字も名前も平均的な2文字。小学校5年から続く仲良し3人組。そ

して、あたしが希望するニックネームは愛梨沙に独占され続けている。

「ねえ、順番にお風呂はいろいろよ。あたし、先に身体を洗うから」

3人バラバラにかけ湯をして。

「それじゃ——いっしょにお風呂、はいりましようよん」

「たっぷりイチャついてミツちゃんに見せつけようね」

やってろ。

今日は、話が下ネタに流れまくってる。のも、しかたないかも。

ラブの同級生のひとりが、この夏にロストバージンしたって判明。そりゃ、ポニテがストパになって、カラーリップクリームだもの。なんて以前に、肌の張りと艶がワンランクアップしたとラブは言ってる。その子の友達が問い詰めたら否定せずに「んふふ」なんて余裕の微笑。肌の張りと艶に関しては、あたしのクラスにも怪しい子がひとりいる。

というわけで。ラブもメグも遠い未来のロストバージンが、一気に目の前に。

だけどねえ。処女卒業は、学校卒業してか

らでも遅くないと思うのが普通じゃないかな
——と客観的に考えてしまうけど、あたしの
主観は別の意見を持ってるらしい。

もちろん、ラブとメグはレズ仲じゃないの
で、バスタブの中でいちゃついたりはしない
し。メグはDカップを羨ましがっても、触っ
たりもしなくて。

下ネタにあたしが食いつかないので、それ
以外のよもやまさか話（違？）に花を咲かせ
て。あたしが身体を洗い終わったら（シャン
プーはパス）ラブとメグが洗い場で押し合い
へし合いして。

あたしが先に出て2階のメグの部屋で待つ
てたら、2人が一緒に上がってきた。てこと
は、脱衣場でも押し合いへし合い？ ほんっ
とくに、2人はくっついちゃわない？ あた
しも、じゅうぶんに下ネタモードになってる。

メグのお母さんが差し入れてくれたケーキ
（寝る前にカロリー摂ったら太るとメグがぶ
うたれて、それじゃあ下げるわねと言われて
3人で平謝りして）とお茶を囲んで。

姦しい話題は、やっぱり下ネタで。理想の
ロストバージンを論じ合う流れになったのは、

もはや必然。

「星の見えるペンションとか海辺のホテルとかテーマパークの豪華なホテルとかは、どうでもいいな。あまり男臭くなくてきちんと片付いてるなら、彼の部屋もいいかな」

メグがまともというか、所帯じみたことを言う。

「熱愛があれば理想だけど、それよりもテクニシャンにお願いしたいな。痛くなくて、最初から感じさせてくれて」

それは切実な願いかもしれない。体験談とか読むと、あまりの激痛で半年間も失敗続きだったとか、性交は成功したけど激痛で気絶してしまったとか。その一方で無血無痛で終わって、彼氏に疑われてるなんて悩みもネットで見かけるし。実際、どうなんだろう。

最初から感じるというのも、クリちゃんをじゅうぶん（自分で？）開発してて、痛みが少なかったら可能だと思う。膣性感までは無理だろうけど。

「わたしは、結婚まで処女を守るかもしれないな」

うわあ、絶滅危惧種のご意見。

「処女を捧げたんだから、わたしのことを大切にしてくれて、しおらしく。でもって、胃袋も財布もがっちり掴んで——もちろん、ペラペラの財布じゃやーよ」

これまた、実も蓋もない将来設計。

「でも——思いっきり高く買ってくれるなら、売ってもいいけど。どっかで、そういうオークションやってないかな」

結婚まで処女を守るって人が、そういうことを言う？

「いくらだったら売るのよ？」

「最低入札金額は100万ね」

「どわあ。でも、それくらいなら処女喪失AVで稼いだら？」

「あれって、50万以下だよ」

なんで、それを即答できるかな？

「裏ってやつよ。表で合法で50万なら、非合法は100万くらい固いんじゃない？」

拉致とか借金のカタとかで女の子を調達してる可能性もあるけど。2人が思いつかないなら、あたしは黙っとく。

「そういうの女優を募集してるとしても、裏サイトでしょ。たどりつけないよ」

試みたことがありますそうな口ぶり。

「ねえ、ミッチんはどうなの？」

「え、あたし？」

「お風呂でもそうだったけど、ずううっと聞いてばかりで、ちっともしゃべらないじゃない。なんか不機嫌？」

「そんなこと、ない。ロストバージンとかSEXとか、そんな話ばかりだもん」

「そうか。ネンネのミッチんには刺激が強すぎたか」

「そう言えば。昔からこういう話題、自分から持ち出したことはなかったよね」

「んん……たしかに。あたしだって、そういうの興味はあるよ。だけど、いくら親友の間柄でも、気軽に話しちゃいけないような気がする」

「ふうん。お堅いんだ」

「ま、いちばん年下だもんね」

「ぶうううう」

いつものパターンに落ち着く。あたしの名前の弥愛は、3月の弥生からきている。あと3週間も遅く生まれていたら、1学年下になっていた。

あとは、よもやまさか話に戻って。3人で相談しながら恋愛アドベンチャーやったり、リアルカードで遊んだり。日曜日になるまで（土曜日の25時ともいう）夜更かししてから、無理矢理に3人かたまってベッドに潜り込んでというかしがみついて。

すくなくとも約1名はオナニーできなくて悶々として、なかなか寝付けなかった。

あたしが下ネタ話に距離をおいてるのは、自分がアブノーマルだと自覚してるから。あたしの理想とするロストバージンを打ち明けたら、ドン引きされて軽蔑されるかもしれない。123グループが壊れるのはかまわない（ことは、絶対に無い！）けど、クラスに噂が流れたりしたら、イジメられようとなれまいと、あたしは不登校する。

だけど。学校ではネンネと思われててもいいけど。だからって、自己否定はしない。ウジウジ悩むのも性に合っていない。ロストバージンした子みたく、積極的に一步を踏み出すことに決めた。いや、もう踏み出してる。

● 3歳の処女です。メール調教してもらえま

すか？

前略 名和戸武智様。

初めまして。HNはラブです。

私は●3歳の●学2年生です。

勿論処女ですが、Hな事やSMに凄く興味が有ります。

匿名のメールですから、友達にも話した事の無い本心を書くと、私は被虐と云う物に、凄く憧れています。例えば、想像する理想のロストバージンは、こんなのです。

- ・何人もの暴漢に襲われて、膣だけでなく口も肛門も一辺に犯されます。
- ・「犯してください」と自分から御願いするまで、縛られて吊るされて、鞭で叩かれたり蠟燭を垂らされたりします。でも、私が降参しても、サルグツワをされているので、返事が出来ません。
- ・クラスメートが登場するので、ちょっと嫌だなあとも思いますけど、イジメでモップの柄でロストバージンさせられるのも、素敵かも知れません。

こんな事ばかり考えていますが、実行

する勇気が有りません。

自縛とか自虐とかを試してみますが、乳首に洗濯バサミを付けるのは30秒が限界でした。クリトリスは1秒で降参して泣きました。

でも、もしも、名和戸様から「これをクリアしないと、もうメール調教してあげないよ」とか言われて、厳しい課題を出されたら、きっと頑張れると思います。

洗濯バサミで無くても良いです。

針とか縄褌とかの御命令でも頑張ります。蠟燭は、部屋に臭いが籠るので困ります。

それから、自縛は難しいです。手を前で縛るのは簡単ですが、後ろで縛るのは形だけの真似しか出来ません。縄で輪を作って両側から手を入れて捻じるのですが、その気になれば、すぐに手を抜く事が出来ます。

自縛ですから自分で解ける工夫が必要ですが、解く迄に何分も掛かるような自縛の方法は、ネットで画像で解説されていますが、自分で試しても上手く出来ま

せん。

もしも簡単に出来て厳しい自縛の遣り方を知っているなら、それも教えて下さい。

追伸

きっと、名和戸様の目から見たら、私のしている事は児戯に等しいように見えるでしょう。

でも、『マゾ妻逆調教日記』の記事を読むと、初心者にも親切で厳しい人だと思いました。

早々

(後略)

1. Side Papa マンネリプレイ

ピンポーン。

インタホンのモニターを見るまでもない。エントランスのオートロック『69+呼出+6969+呼出』と押すのは妻の萌^も恵^えしかない。

いちおうは、モニターで姿を確認する。股下五センチのフリルミニスカにノースリーブのブラウス。気合がはいっている。

私も気合を入れて。一番下の抽斗を開けて、浣腸と麻縄と鞭を確認しておく。

五分ほどで、ペントハウス——というほど大仰ではなく、屋上に設置されたプレハブ小屋のドアが開く。私はわざと知らんぷりでパソコンに向かい続ける。

ほう。『メール調教のお願い』か。久しぶりだが、まあ期待はできないだろう。

「旦那様、モエをかわいがってください」

旦那様という呼び掛けは、SMプレイのときに限ってのことだが、結婚したときから使わせている。せいぜい二時間かそこらの間だ

けでも、彼女の『御主人様』になった男は数多くいる。差別化というわけだ。

私は、土下座して額を床に擦りつけているマゾ牝を振り返った。

「お言いつけのとおり、長袖とパンツの着替えを持ってきました」

手足に縄や鞭の痕が残っても、外を歩ける。三十代ともなると、少々のマッサージではプレイの痕がすぐには消えないが、今夜は弥愛がクラスメートの家でパジャマパーティー。私もモエも、久しぶりに気合がはいっている。

「立て」

間近に見ると、ずいぶんくたびれたブラウスとスカートだ。肌の露出よりも、こんなボロを着て外を歩く方が羞恥プレイじゃないのかと思ってしまう。が、モエの意図はよくわかった。

予定は変更。縄ではなく手錠にする。

私は無言で手錠を取り出して、モエの左手に嵌めた。両手首を背中にまわさせて、後ろ手錠に拘束する。

こういったとき、いろいろと言葉責めをする者もいるが、私は苦手だ。そしてモエは、

M嬢として客のプレイスタイルに合わせるように最初から躡けられていたし、結婚してからは私ひと筋。のろけになるが、すっかり私色に染め上げられている。

私はモエの正面に立って、ブラウスの襟首に手を掛けた。

びりりりっ……

無言で引き千切る。

「きゃあっ……ひどい」

期待していた通りのことをされて、それなのに本気のように聞こえる。女は生まれながらの女優だと感じ入る。のは、後回しにして。

ブラジャーも、よれよれ。縁の糸がほつれている。しかし引き千切るのは無理なので。ストラップをずらして、そのまま引き下げた。

「いやあ！ 羞ずかしい」

背中を向けてうずくまる。

スカートはホックをはずして、ふつうに脱がせて。ショーツは抽斗からカッターナイフを取り出して、切り刻んでから引っぺがす。

「素っ裸になったところで、もうすこし愉ませてもらおうか」

うずくまったままのモエの首に、大型犬用

のごつい首輪を巻き付ける。背中越しにDカップの乳房を両手で鷲掴みにして引き上げた。

「そら、立て」

靴下を穿いたままの足を股間に差し入れて持ち上げる。足の甲に、湿った感触が伝わる。

「いやあ……」

というのは、もっとひどくても大丈夫だという意味なので。

「逆らうと泣きをみるぞ」

右手を乳房からはなして、クリトリスをまさぐる。すでに固く尖っているそれを摘まんで引っ張る。

「痛い、痛い……」

本気で痛がって、モエがようやく立ち上がった。

私は首輪に長いリードをつないで、モエを外へ引っ張り出した。屋上の向かい側にある給水塔へ引っ張ると、最初は素直に歩いたのだが、ペントハウスの陰から出たところで立ち止まった。

「まだ逆らうつもりか？」

「でも、看板がはずれて……います」

素の声だったが、言葉づかいは旦那様に対

するそれを残していた。

収入の足しにと、このビルの屋上には広告の看板を張り巡らしてある——というのは、管理会社への建前で。実は、疑似屋外プレイの舞台装置だ。

ところが今日は、わざと一枚だけ取り外してある。もっとも、給水塔からは遠くの山並しか見えないし、途中の動線上から見えるのも遠くのビルだけだ。何時何分に裸の女がそこを通るとわかっていても、はたして双眼鏡で発見できるかどうか——などと、モエを安心させたりはしない。

「フィットネスでシェイプアップした自慢のボディだろ。見てもらいたくてうずうずしてるんじゃないか？」

ほっと、モエの顔に安堵が浮かんだ。

「はい、旦那様がお望みでしたら」

羞ずかしそうに——といっても、羞恥に悶える風情でもなく、私に近づく。

気合を入れ過ぎた。慣れない言葉責めを試みて、かえって心の裡を見透かされたようだ。

給水塔の前に立たせて、リードを鉄脚の上のほうに結んだ。

モエは後ろ向きになっている。八十八センチのヒップは綺麗な逆ハート形。六十センチのウエストには、だぶつきの気配すらない。「こっちを向け」

モエが無言で向きを変える。後ろ手錠に拘束してあるから、どこも隠せない。

八十六センチのDカップは、さすがにすこし垂れているが、子供を母乳で育てたことを考えれば、じゅうぶんに美乳だ。下腹部も引き締まっている。そして、盛り上がった土手からは色の濃い小淫唇が二センチほど垂れている。

そして、飾り毛は一切無い。定期的に私が剃っているのだが、自分でも抜いているので、10年前に比べると地毛もずいぶん薄くなっている。

「そこで待っている。向きを変えるなよ」

「……はい」

うつむいて、つぶやくような返事。モエの言い分だと、こんなふうに分の意志で露出しているほうが、大の字に磔けられるより羞ずかしいそうだ。磔なら、もしも誰かに見られたとしても——痴女ではなく、サディスト

に虐められている被害者だと思われるから
そうだ。

その羞ずかしいポーズを命じておいて、私
はペントハウスに引き返した。

わざと鞭を置いてきたのは、モエへのサー
ビスだ。屋外だから、蠟燭はないだろう。道
具を取りに戻るのだから水責めでもない。鞭
か、針か、浣腸か——と、サスペンスを味わ
わせてやっている。

「怖い……」

私が手にしている鞭を見て、モエの顔に脅
えが浮かんだ。もちろん、鞭の威力は知り尽
くしている。

バラ鞭だが、一本ずつを革で編み上げてあ
るので重量がある。渾身の力で鞭打っても肌
が裂けたりはしないが、三日くらいは痕が消
えない。

「正面を向いているよ」

鞭を水平にピンと張って、乳首をしごいて
やった。すでに充血している乳首が、いっそ
う固くなる。

「十発の数え打ちだ。間違えたら五発ずつ増
やして、最初からやり直させるぞ」

「はい、頑張ります」

無毛の股間に指を突き立てて、まだじゅうぶんに濡れているのを確認しておく。

二歩下がって、鞭を構えて。

バッシャン！

七割くらいの力で水平に薙ぎ払った。乳房がひしゃげと横へゆがみ、ぷるんと元に戻った。

「ひとつ……」

バックハンドは威力が落ちるので全力。

バッシャン！

「ふたつ……」

六発で小休止。すでに乳房は全体が赤く脹れて、いっそう鮮やかな筋が無数に刻まれている。

「すこしはこたえたようだな」

縮こまっている乳首をつまんで、指の腹で転がす。

自分で書いている小説なら、思いきりつねるかねじるかするところだ。ヒロインが本気で厭がって泣き叫んでも、サディストは容赦しない。

いや、現実でも。本気で泣き叫んでもけっ

して手加減しないでください——というマゾ女もいる。私は、過去にそういう女を三人は知っている。それで悦虐に至ったのはゼロ。初心者にありがちな、観念マゾというやつだ。もともと、一人だけは再度のプレイを望んだから、彼女は真正ドMだろう。残念ながら、裏を返す前に別のパートナーを見つけて、それきりになってしまったが。

モエには、そこまでのM性はない。そもそも、手加減無しのプレイを望まない。本人はM100%のつもりだが、私の感覚ではM70%といったところか。

とはいえ、キーワードを嫌うのは、私と同じだ。

厭だ痛い赦して耐えられません——なにを泣き叫ぼうと、サディストは無視する。しかし『お慈悲を願います』には、責めを緩める。『お赦してください』と言われたら、その責めを打ち切る。

キーワードは、人それぞれだ。『ストップ!』なんて無味乾燥なのもあれば、サディストに名前呼びかけるというものもある。私たちが使っているキーワードは、モエがアルバイト

をしていた『砂糖と蜜の店』から引き継いだ。

キーワードを決めておけば、責める側としては言葉の裏を斟酌しなくていいのだから楽ではある。

しかし責められる側は、もう限界だと思ったとき、キーワードをみずからの意志で封印しなければ壁を突破できない。

モエにはそこまでのマゾ性向が無いし、それでも（ある程度は）厳しい責めを望む程度にはマゾだ。

指の刺激で乳首がふたたび勃起したのを見計らって、私は鞭打ちを再開した。

バッシャン！

「ななつ……」

モエは正確に数えた。わざと間違えて鞭をおねだりする余裕はないというわけだ。

とはいえ、責める側が相手の限界を低く見積もっては、かえって可哀想というものだ。

十発の乳房打ちを終えて、私は次の命令を与える。

「脚を開け」

「あああ……」

悲しそうに呻いて、モエは逆に太腿をぴた

っと閉ざした。赦しを願う言葉は口にせず、うなだれて、憐れみを乞う眼差しを向けようとしめない。まだまだ、無慈悲に責め罵られるのを持ち受けている。

私は鞭の柄を、強引に太腿の間に押し込んだ。ぐりぐりとえぐって、裏へ貫通させて、鞭の両端を握って引き上げた。小淫唇を割って、鞭が股間に食い込む。

「素直に脚を開け」

「厭です。開いたら、そこを叩くつもりなんでしょう？」

私は黙って、いっそう強く鞭を引き上げた。そして、前後にしごく。

「きひい……」

初めての、切迫したか細い悲鳴。

最後にこの鞭を使ったのは三か月前。そのときも、ここで泣きがはいった。そして、膝を震わせながら脚を開いた。それは、今日も同じだった。

「そんなに後じさるな。もっと前に立て」

「そんな……ひどいです」

甘えた響きを残した抗議の声。モエは、半歩ほど前に出た。

「これは数えなくていいぞ。五発を耐えきったら褒美をやる」

褒美がちっとも褒美でないことは、私もモエも知っている。

「そらっ！」

気合声というよりは、モエを励ます（あるいは脅す）意味の掛け声。

ビヤシャン！

水平に振り抜くのではなく上へ振るのだから勢いは弱い。しかし、半歩前に立ったから、鞭の先端が鉄脚に当たらず、跳ね上がって肛門まで叩く。

「ひいいっ……！」

本気の悲鳴だが、まだ大丈夫。

ビヤシャアン！

腕を止めずに振り抜いた。

「きひいっ……痛い！」

痛みが悦虐を大きくうわまわったようだ。

三発目は手加減をして、鞭が当たった瞬間に手首を返した。

パシャン！

「あうう……」

パッシャン！

「ひいいい……」

五発目は、これが最後とばかりに大きく振り抜いた。

ビヤッシャアンン！

「ひぎゃああつ……！」

雑じりっけなしの悲鳴を吹いて、がくっと膝が崩れる。

「よく耐えたな。しばらく休ませてやる」

給水塔の鉄脚に吊るした裸身をしばらく鑑賞してから、私はペントハウスに引き上げた。

(後略)

1. Side Mama 限界ぎりぎり

九月も下旬だというのに、ノースリーブのブラウス。しかも、フリルのミニスカート。十年前の、SMプレイを再開した頃なら、わたしも露出プレイに燃えたけれど、とっくに三十路を越えた今では羞ずかしさが先に立ってしまいます。

セクシーな服だったら、それなりの気持ちにもなれるでしょうが、この服は救援物資に送っても雑巾にされそうな、あちこちほつれて補修して生地もすり減った古着なので、羞ずかしさに生活感情が混じってしまいます。

だから、こんな服でノーパンノーブラなんて、とんでもない。門恭^{ひろゆき}さんに強制されたら実行するかもしれないけれど、彼はわたしの気持ちを先読みしすぎて、わたしが自分で限界だと思っている以上の厳しい責めをしてくれません。

でも、だからこそ、結婚生活を続けてこられたのかもしれない。

今日は思い切って無茶をしてくださいって、

おねだりしてみようかしら。だけど、彼がほんとうに限界を超えるような責めをしてくれたら——わたしが味をしめないようにしなくては。プレイをエスカレートさせていったら、どこかで結婚生活が破綻するのではないかと思います。

いっそのこと、夫と妻ではなく、一日二十四時間、一年三百六十五日、ずっと御主人様とマゾ牝奴隷の関係でいたいなんて妄想をすることもありますけれど。妄想だけ。そこまで、わたしは真正マゾではないつもりです。

アルバイトにM嬢を選んだのは、そういうのに興味があったことは事実ですけど、本番をしなくていいから処女を守れるし、ヘルス嬢よりずっと稼げると思ったから——というのが、ほんとうのところですよ。

おかげで（上手な人に）縛られる快感とか肛門性感に目覚めて。しかも優しいサディストに出会えたのですから、じゅうぶんに幸せなのですけれど。どうしても『けれど』がつきまわってしまいます。

などと考えているうちに、賃貸マンションのビルに着きました。門恭さんの所有してい

るビルです。ローンを組んで賃貸マンションを買って、賃貸収入でローンを返済しながら、すこしは純益が残る仕組みです。入居者が少ないと赤字になるのですが、今のところは順調のようです。

エントランス前のキーボードを『69+呼出+6969+呼出』と押して、中へ入ります。

いよいよ、たっぷり虐めてもらえます。どれだけ注意していても、手首に縄跡が残っていたり太腿に鞭痕が刻まれていたりしたら、ふとした拍子に娘に見られるかもしれませぬ。わたしはマゾだから、パパに虐めてもらっている――なんて、言えるはずもないです。両親の（ノーマルな）性生活を見てしまって、それが一生のトラウマになっているなんて、読者投稿四コマ漫画の定番ネタですからね。

でも、今夜は娘がお友達の家でお泊り会。どうせ、明日の午後までは帰って来ないから、身体じゅうびっしりプレイの痕跡が残っても大丈夫なのです。帰りに着替える服も、ちゃんと持って来ています。

エレベーターに乗って、Rのボタンを押し

ました。ふつうは光りませんが、さっきのパスワードを打ち込んでから五分間は反応するのです。屋上へ出るドアは、わたしと門恭さん（と管理会社）しか持っていない鍵で開けます。娘の^み弥^あ愛には持たせていません。だって、屋上のペントハウス(プレハブの事務所)は、門恭さんのもうひとつの収入源でもある同人サークルの仕事場なので、娘には見せられないようなコミックとかSM小説とかが何十冊と置かれています。抽斗の奥には、縄とか鞭とかも隠してありますし。

ドアの前で深呼吸をして。ノックをしないで、中に入ります。

わたしも門恭さんも、日常からSMへのスイッチの切り替えが苦手なのです。M嬢をしていたときは、プレイルームで土下座してお客様を待っていればよかったのですが。

今、門恭さんの後ろに立っているのは妻の^も萌^え恵です。

わたしは気持ちを切り替えて、彼の背中に向かって土下座します。

「旦那様、モエをかわいがってください」

御主人様ではなくて旦那様。門恭さんの発

案です。これなら、日常の場でうっかり口走っても、そんなに不自然ではないでしょう。同様に、わたしはモエと名前のままで呼ばれます。家ではママだから、やはりプレイ専用の二人称ということになりますね。

旦那様が振り返られました。

「今日は、長袖とパンツの着替えを持ってきました」

弥愛がお泊り会で帰って来ないことは、旦那様もご存じです。家に帰るまでの間もSMプレイの痕跡を他人に見られることがないから、たっぷり虐めてくださいという意味を、もちろん旦那様はわかってくださります。

「立て」

旦那様が、わたしのぼろぼろの服を品定めするかのようにご覧になります。

そして、机の抽斗から手錠を取り出されました。わたしの左手首をつかんで、金属の輪をカチリと閉じます。それから、わたしの両手を後ろへねじって、右の手首にも。

両手の自由を奪われると、とくに後ろ手にされると、胸が切なくなっていて、腰の奥がじいんと痺れます。あ……熱い汗がじゅくじゅく

っと牝穴（プレイのときは、できるだけ卑猥な言葉で考えます）からあふれてきます。

旦那様が正面に立たれて、腕を伸ばしてわたしの襟首をつかまれました。

びりりりっ……

無言で、強い力で、ブラウスを引き千切られました。

「きゃあっ……ひどい」

期待していたとおりのことをしていただいても、女としては抗議しなければなりません。

旦那様は何もおっしゃいません。泣き叫んでも誰も助けに来てくれない密室で、わたしは旦那様に襲われているのです。

旦那様の手が、ブラジャーのストラップに掛かりました。カップとひとまとめにして、ぐいっとずり下げられました。

「いやあ、羞ずかしい！」

背中を向けてうずくまりました。最初のご挨拶は別ですが、悦んで虐めていただいているというパターンは嫌いです。わたしの意思は無視されて虐められているという形が好きです。

スカートを太腿までずり下げられました。

チキチキッという音は、カッターナイフの刃です。それがショーツに差し込まれて、ずたずたに切り裂かれました。

「素っ裸になったところで、もうすこし愉しませてもらおうか」

うずくまっているわたしの首に、太い首輪が巻きつきました。

日々バストアップに精進しているDカップを背後から鷲掴みにされました。指が根元に食い込んできます。

「そら、立て」

あああ。股間を足の甲で持ち上げられています。わたしのじゅくじゅくを気づかれたでしょう。

「いやあ……」

ひどいことをされているのに、こんなに濡らすなんて、羞ずかしいです。

「逆らうと泣きをみるぞ」

右の乳房から痛みが消えました。でも、それは一瞬。淫核を摘ままれて——ひいい、抓りながら上へ引っ張られています

「痛い、痛い……」

わたしは目のふちに涙をにじませながら、

跳び上がるようにして立ちました。

首輪に犬の散歩用のリードをつながれました。引っ張られて、外へ連れ出されます。

いつものように、向かい側にある給水塔に磔にされるのでしょうか。適当に抗いながら、素直についていきます。

え……？

途中で、わたしは立ち止まりました。屋上は周囲をぐるりと看板で囲まれています。広告収入のためですが、屋外プレイの目隠しがほんとうの目的です。

リードを強く引っ張られました。

「まだ逆らうつもりか？」

「でも、看板がはずれて……」

看板があった空間の向こうにビルが建っています。他人に見られるかもしれないという不安は、わたしの牝穴を疼かせます。でも、ほんとうに見られてしまうのは——すこし厭です。

「フィットネスでシェイプアップした自慢のボディだろ。見てもらいたくてうずうずしてるんじゃないか？」

からかっていらっしゃるような口ぶりです。

では、何もかも計算した演出なのです。

「はい、旦那様がお望みでしたら」

ビルの窓は、とても小さく見えます。ビルからは、わたしのヌードは、もっと小さくしか見えないはずです。それでも、拘束されていることくらい見分けがつくかもしれません。

まだちょっと羞ずかしいのですが、ちょっとだけ勇気を出せば克服できます。

わたしは旦那様に引かれて、給水塔の前まで行きました。

旦那様はタンクを支えている支柱の高いところに首輪のリードを結ばれました。

わたしは支柱に向かって立っています。全裸で無防備に正面を晒すのは、羞ずかしいことが好きなマゾ女でも、たしなみに欠けます。それに、旦那様はわたしの八十八センチのヒップを鑑賞なさるのがお好きです。旦那様がおっしゃったように、シェイプアップを心がけていますから、すごくキュートな逆ハート形だと、ちょっぴり自惚れてもいます。

「こっちを向け」

ご命令には逆らいません。後ろ手錠を掛けられているから、どこも隠せません。

旦那様の目が、上から下まで、ゆっくりとわたしの裸身を舐めていきます。娘を母乳で育てたと言うと、たいていの人がびっくりするくらい、八十六センチのDカップは若々しく張っています。

わたしの股間には、飾り毛がありません。ときどき旦那様が剃ってくださるし、自分でもお手入れをしています。わたしに飾り毛があったのは、M嬢のアルバイトを始める前と、弥愛を妊娠してからの四年間だけです。

「そこで待っている。向きを変えるなよ」

自分で正面を向いて淫部を晒しているのは羞ずかしいです。大の字礫にされれば、不可抗力ですから諦めもつきます。でも、『厭』は言えません。わたしが本気で言っていると誤解したら、旦那様は赦してくださいます。

「……はい」

素直に、羞ずかしそうにお返事をしました。

旦那様は、わたしを責めるための道具を取りに、ペントハウスへ引き返されました。きっと鞭でしょう。ここでなら、何かに当たる心配をせずに、思いきり振り回せます。

きっと、いつもよりずっと鮮やかな鞭痕が

肌に刻まれるでしょう。そう思うと、また牝穴から蜜が滴ってきます。

わたしは、肌を縄の跡や鞭の傷で飾られるのは好きです。でも正直にいうと、痛すぎるのは苦手です。一本鞭で股間を打たれて気を逝かす人がいます。わたしには、とても真似ができません。

旦那様が戻られました。すごく凶悪な鞭を手にしてらっしゃいます。

「怖い……」

本心です。SMグッズの専門店でなければ売っていない、ハードなバラ鞭です。紐の一本ずつが革で編まれているので、一本鞭のミニチュア版を束ねたようなものです。

「正面を向いているよ」

水平に張った鞭の紐の間に双つの乳首を挟んで、左右にしごかれました。痛いのに、乳首が固くしこっていきます。

「十発の数え打ちだ。間違えたら五発ずつ増やして、最初からやり直させるぞ」

耳元にささやかかれて、つい本音を口にしてしまいました。

「はい、頑張ります」

旦那様は牝穴に指を突き立てて、わたしが鞭を期待して濡らしているのを確認されてから、鞭を構えます。

腕が水平に上がって、ぶんっと振られました。

バッチイン！

瞬間的な鋭い痛みが乳房を走り抜けました。切られるような痛みの、かなり手前です。

「ひとつ……」

バックハンドで、反対側から鞭が飛んできます。

バッチイン！

「ふたつ……」

今度のほうが痛かったです。

バッチイン！

バチン！

鞭が走り抜けるたびに、乳房がひしゃげて鞭に持っていかれて、ぷるるんと大きく弾みます。わたしの意思とは関係なく、乳房が勝手に踊っています。

「すこしはこたえたようだな」

旦那様が手を休められました。六発目を数えたとき、わたしの声に悲鳴が混じったせい

でしょう。

わたしの乳房、もう赤く腫れあがっています。バラ鞭ですから、細い鮮やかな線刻が無数に刻まれています。

痛みで縮こまっている乳首を、旦那様がこねくりまわります。たちまち勃ってきます。

旦那様が後ろに下がって鞭をお構えになりました。

バッチイン！

「ななつ……」

ひと休みして痛みへの感受性が回復したので、鮮烈なすがすがしい痛さです。

バッチイン！

「やっつ……」

バチン！

「ここのつ……」

バッシインン！

「とお！」

最後の一発は、とびきり痛かったです。

「脚を開け」

休む間もなく、つぎのご命令です。

「あああ……」

わたしは、ぴたっと脚を閉じました。お股

への鞭打ちは苦手です。

もちろん、旦那様は赦してくだされません。逆らえば、鞭打ち以上の罰をいただきます。でも、鞭をいただく姿勢を取るのには、鞭への耐性がついてきたと思われそうで厭です。つらいことは、無理矢理に強いられて泣く泣く従う。そうでなくてはなりません。

ぴったり密着させた内腿の肉をえぐり抜いて、鞭の柄が前から後ろへ抜けました。束になった鞭の紐が淫裂に食い込んできます。

「素直に脚を開け」

「厭です。開いたら、そこを叩くつもりなんでしょう？」

旦那様はそれ以上はなにもおっしゃらず、いっそう強く鞭を食い込ませて、それを前後にしごきます。

「きひい……」

股間にちりちりっと鋭い痛みが走ります。反射的に腰が引けて、でも鞭からは逃がられません。

わたしは痛みを震えながら、両脚をそっと開きました。

「そんなに後じさるな。もっと前に立て」

「そんな……ひどいです」

おそるおそる、ちょっとだけ前へ進んで、引けていた腰をしゃんと伸ばしました。怖いけれど、わたしが限界に達する直前（実は、もっと手前）で責めをやめてくださるだろうと、それは信じています。

「これは数えなくていいぞ。五発を耐えきったら褒美をやる」

ご褒美は肛姦でしょう。それは好きですけど、旦那様は、事前の腸洗滌を浣腸責めになさいます。これは、つらいです。

旦那様が後ろに下がって、鞭を握った右手をだらんと垂らしました。

「そらっ！」

掛け声とともに鞭が弧を描いて、お股に食い込みました。

バシイン！

「ひいいっ……！」

鞭の先端が跳ねて、肛門まで叩きました。

すぐに二発目がきます。

バッシインン！

「きひいいっ……」

鞭の先端が同じように肛門を直撃して、そ

れから鞭全体が淫裂を斜め上へこすり上げます。

「……痛い！」

パシン！

三発目は手加減してくださいました。

「あうう……」

股間が痺れて、痛みの中にちよっぴり快感があります。

パシイン！

「ひいいい……」

悲鳴は、マゾヒスティックな気分を盛り上げる伴奏です。

その余裕を見抜かれました。旦那様のバックスイングが、ぐんと大きくなりました。

ズバッシイイン！

股間から頭まで閃光のような激痛が走り抜けました。

「ひぎゃああっ……！」

混じりっ気無しの悲鳴が喉から吹き出しました。がくんと膝が折れて、首輪が喉に食い込みます。

「よく耐えたな。しばらく休ませてやる」

わたしを給水塔に吊るしたまま、旦那様は

ペントハウスへ戻って行かれました。

息が苦しくなって、たぶん頸動脈も圧迫されているのでしょ、目の前が薄暗くなってきました。股間の痛みをこらえて、ぐっと膝で踏ん張りました。

もしも、わたしが気絶していたら、足が地面に着いているのに首を吊られて死んでいたかもしれません。というのは誇張です。これしきの責めではそんなことにならないと、旦那様よりもわたしのほうがじゅうぶんに心得ています。なんといっても、他人との（サディストとしての）SMプレイの経験がなかった旦那様を一人前のサディストに育てたのは、わたしなのですから。

正確には、ちょっと違います。最初の二回は、SMクラブのマダムに二人とも指導していただきました。その後は、キーワードで責めを加減するプレイで、わたしが門恭さんにテクニックを磨いてもらいました。

「もっときつくお乳を縛って、わたしを泣かせてください」

「鞭が厳しいです。お慈悲をかけてください」

「でも、手首のスナップは、もっと鋭く」

「あうう……お浣腸は限界です。もう、お赦してください」

詳しい経緯は、ずっと後に作られた門恭さんの『マゾ妻逆調教日記』というブログに書かれています。

わたしと門恭さんのSMプレイは、そんなに長く続きませんでした。わたしが、彼の子供を妊娠したからです。

お店としては本番禁止が建前ですから、射精を望まれるお客様（が、ほとんどでした）にはM嬢の場合はイラマチオかアナルファックで対応していました。縛られて（チップ目当てで）レイプされる子もすこしはいましたけれど。

でも、わたしは真正の処女でしたから、たとえ常連のお客様でもプレイの前に、本番行為には百万円の罰金を払うという誓約書にサインをいただいていた。

門恭さんとの十回目のプレイのときです。

「あれ？ この誓約書……？」

百万円を十万円に書き換えておいたのです。わたしには、絶対に処女を守り抜くという

気持ちなんか、ありませんでした。ただ、行きずりのお客様に処女を奪われるのは、女としての誇りが許しません。

門恭さんは、もう行きずりのお客様ではありません。わたしが手塩にかけて育てたサディストという、特別な存在になっています。それに、肌が合うというのでしょうか。まだまだ下手くそな縛り方なのに、彼に縛られると頭がポワンとなるのです。

「んふふ……どう解釈しても、いいわよ」

緊縛のとき、わたしは座禅転がしという縛り方を教えてあげました。ここまですれば、据え膳ですよ。

そして、肌が合い過ぎて。わたしは一発で妊娠してしまったのです。初体験がゴムでは感激が薄れますし、安全日だと高をくくっていたのが失敗（結果的には成功？）でした。

誰の子か疑う余地は無く。門恭さんは男としての責任を取ってくださいました。

悪阻がおさまってから妊娠八か月目くらいまでは軽いプレイを続けていました。でも、剃毛は禁止です。

出産後もSMプレイは続けていましたが、

パイパンとか縄跡などは娘に説明できないので、羞恥プレイが主体でした。ノーパンでミニスカートなんて、すごく羞ずかしくて、旦那様に強く言われてしぶしぶ——なのに、膝までお汁が垂れてしまうのですから、ますます露出プレイが苦手になりました。

十年前に二人目を授かったのですが、かわいそうなことに流産してしまいました。子宮も傷ついて、妊娠は困難と宣告されました。

その悲しみを忘れるためにも、わたしは本格的なSMプレイにのめり込んでいきました。剃毛も復活です。弥愛のお風呂は、パパの担当になりました。

もともと、門恭さんも百パーセントのサドではなく、マゾっ気も人並み以上です。三代までは何年かに一度、全身完全除毛して年上の女王様に虐めていただいていたました。もちろん、わたしとのプレイも続けますが、飾り毛が復活するまでは全裸にならず、イラマチオもしていただけません。

わたしにも、他人とのプレイや浮気を認めてくださっているのですが、自分から積極的にパートナーを探す気にはなれませんでした。

旦那様の目の前で、ほかの人に犯されたことは何度かありましたが、それもお口と肛門だけです。牝穴には、いまだに旦那様しか迎え挿れていません。いっそのこと、旦那様のご命令で誰かにレンタルされてみたいなんて妄想しますけれど、それをおねだりする勇気はないのです。

(後略)

6. Side Love ご主人様の正体

即Resが返ってきた。お説教はやだよと身構えながら。でも、もしかして。オドオドワクワクビクビクドキドキ……

ラブちゃんへ

リアル調教を受けたいというきみの熱意は、よくわかりました。

しかしその前に、きみには取り組まねばならない問題があるね。学校の間テストだ。ぼつぼつ、テスト週間じゃないのかな。

SMのことは忘れて本業に集中しなさい。

中間テストが終わって、まだリアル調教を受けたい気持ちを持ち続けていたら、そのときにメールをください。

メールをもらったつぎの週末に、ひと晩じっくりと調教してあげます。

ひと晩休まないと跡が消えないような、ハードな調教だから、覚悟しておきなさい。

そう来たか。

でもでも、『ひと晩休まないと跡が消えない
ような、ハードな調教』って、どんなんだろ。
やっぱ鞭かな。針は傷が目立たないし。でも、
針は無しってことじゃないと思う。

ギチギチに、身動きできないくらい緊縛さ
れて、課題をクリアできなかった罰に鞭打ち
されて。それもお尻くらいじゃすまなくて、
おっぱいも、それからそれから……お股を縦
に打たれたりして。罰が終わったら、縄をほ
どいてくれるんじゃないくて、サルグツワを咬
まされて、針の出番かな。乳首十文字。「んん
んっ」て首をぶんぶん横に振っても、「これ
がおまえの望んだことだろう」なんて、無慈
悲にクリちゃんにブスリ。そして、とどめ
にうんと太い肉の針で……

ふわあ。もう穿いてられないくらい、ショ
ーツが濡れちゃった。

自縛も洗濯バサミも、もどかしい。ピンク
ローター！

いったん裸になって、パジャマをじかに着
て。布団に潜り込んで、スポンを膝までずら

して、胸もはだけて。グシヨグシヨのショーツを口に詰め込んで。ねっとり甘い（はずがないんだけど、マゾ気分のせいだね）。左手でおっぱいを乱暴に揉みながら（痛いけど、今の気分ぴったり）ピンクローターで。

ジイ`イイイイ……

「むう`うう`う……ぶう`う`う`っ！」

ふはああああああ……秒殺アクメ。

いちおう身だしなみは整えてから、余韻をフンワカ楽しむ。

まさに、一発抜くって感じで気分が落ちていてから。さあ、テスト勉強しなくちゃって、ベッドから出た。

成績が悪かったらお仕置きとか、逆に、オフ会中止とかのペナルティはなかったけど。やっぱ、親にも友達にも内緒で後ろめたいことするんだから、その前に前めたいことも、きちんとしとかなくちゃね。

指だけのオナニーも封印して、セッセッセと勉強に専念して。

テストは、すべての問題に絶対の自信を持って答案を書けた。こんなことって、初めて

の快挙。まさかオール100点なんてあり得ないけど、自分史始まって以来の高得点の確信がある。SMであなたも成績UP——なんちゃって。

中間テストが終わりました！

御主人様

ラブです。

今日でテストが終わりました。

オフ会の調教を楽しみに頑張ったので、実際に答案が返ってきて順位が分かるのは2週間くらい先ですが、凄く高得点の自信があります。

待ち合わせの場所と時刻を御命令下さい。

調教の時に御願いがあります。ラブが本気で嫌がって泣いても懇願しても、決して調教を中断しないで下さい。

どこまで厳しく責めるかは、経験豊富な御主人様にお任せします。

では、お会いして調教して頂く日を楽しみにしています。

早々

テスト最終日は午前で終わったので、帰宅

して即メール。そしたら、夕方にはR e s があった。

リアル調教志願マゾのラブへ

テスト結果に自信があるのか。では、褒美として200mlのグリセリン浣腸をしてやろう。初心者には100mlでも脂汗を浮かべるほど辛いから、ラブはどれだけ苦しむかな。

調教について、いろいろと考えたが、ラブの処女を奪うのはやめておく。将来の恋人のために残しておいてあげよう。そのかわり、アナルバージンを奪う。イラマチオもさせる。もし、ファーストキスがまだだったら、この1週間ですませておくこと。

その他の責めは、会ってからののお楽しみということにしておく。

では、日時と場所、その他の注意だ。

日時：来週土曜日、午後3時30分

（翌朝まで拘束するから、そのつもりで）

場所：丘野市JR駅前噴水

注意：旅行のような服装で来ること。

長袖シャツとスラックスがベストだが、これは縄跡や鞭痕を隠すためだから、来るときは別の服装でも良い。

ただし、過激な露出は控えること。背伸びしてメイクなどはしないこと。どうせ、涙でぐしょ濡れになるのだからね。

最後に：怖くなってリアル調教をやめるのなら、それがラブのためにはいちばん良い。ドタキャンでも怒らない。ただし、二度目は無いし、メール調教もおしまいにするからね。

名和戸武智

ドタキャンなんて、絶対にしない。そりゃまあ、リアルのSMがこんなに厳しいなんて知らなかったとか後悔するかもしれないし、それっきりで足を洗うかもしれないけど。逃げたら、絶対にそれ以上の後悔をするって、わかりきってるもの。

ファーストキスねえ。小1のときの松田クンとのあれは、唇を合わせたただだからノーカンだね。

そだ。ファーストキスもご主人様に奪ってもらっちゃお。それとも、ご主人様のペニスがファーストキスの相手——なんてのも、得がたい体験かな。

バージンを奪ってもらえないのが残念だけど。SEXとSMは別物ってよく聞くものね。

絶対に行きます！

ご主人様

ラブです。

絶対に行きます。遅刻しそうになったら、必ずメールします。

御主人様の指定された服は、着替えに持って行きます。

最初にお会いする時は、デニムジャケットとデニムミニスカート（膝上15cmくらいです）で行きます。

ファーストキスは未だですけど、適当な相手を見繕うなんて、しません。ラブの唇も、御主人様に捧げます。

早々

気が変わったりしないと思うけど、それでもさっさと送信しちゃう。

そして。

土曜日は、なかよし123チームで遊園地へ行って。

日曜日は、うだうだして。でも、オナニーは我慢。満漢全席を食べる前にコンビニの肉まんを食べたらもったいない。フルコースの前のハンバーガー、懐石料理の前のおにぎり（しつこい）。

週末に向けて、テンションを高めて欲求不満をつのらせる。でも、我慢しきれなくて、水曜日にちょこっと指（だけだよ！）でイタズラ。

そして、金曜日には妄想が高じて。

ほら、アダルト画像だと、マゾ女性ってパイパン率が高いよね。それに、名和戸武智先生のSM小説って、ほとんど必ず、ヒロインがパイパンにされちゃうから。

断固パイパンたるべし！

入浴のときにムダ毛処理してるけど、今夜はお股もお手入れ。

除毛クリームが粘膜につくとかぶれたりするそうなので、ビラビラを割れ目の中に押し込んで、傷テープで貼り合わせといて。

脇の下とお股に塗り塗り。足とか腕は、ま

ったくの産毛だからそのまま。全身剥き卵なんて憧れるけど、学校で突っ込まれるしね。

明日のこととか考えるとムラムラしてクリームの中に指を突っ込みたくなっちゃうから、湯沸かしのパネルで時間を計りながら、英単語の暗記とか。

きっちり10分。付属のヘラでクリームをこそげ落とすと、黒い筋が流れて、その下はツルツルのお肌。入念にクリームを落として、もっかいお湯に浸かって、調教待ちまっさらボディの出来上がり。

そして、待ちに待った土曜日。メールに書いたとおりのデニムで、着替えはバッグに詰め込んで。

「それじゃ、行ってきまーす♪」

ママに挨拶して、いざ出発。

パパは不在。パパは前に勤めていた会社のOB会とかで温泉に1泊2日の旅行で、朝早くに家を出てる。

あたしは、なかよし123チームじゃなく、丘野市とは方角が違うけど、この春に引っ越してった友達のとこに遊びに行くことにした。

1 2 3 チームじゃ、友達の友達の友達の友人まで噂が広がっちゃう。

それに、転校した子の家の電話番号は親に教えてないから、連絡があるにしても、あたしのスマホにだけ。いちおう、その子には断わってある。彼女にアリバイ工作が必要なときは、引き受けてあげるって交換条件。

私鉄から J R に乗り継いで、噴水広場には 3 時 2 0 分に到着。

噴水の前でキョロキョロしてたら、30 歳くらいの（お姉さん + 小母さん）÷ 2 が、まっすぐ近づいてきた。

「あなたが、ラブちゃんね？」

ええっ……？ まさか、この人が名和戸先生なわけ、ないよね。マゾ妻さん？

「あちきは、名和戸氏のサークル仲間で、^{かぶと}甲姫ひめっていうの」

「あ……はい」

「家族連れに偽装しないと、チェックインのとき怪しまれるでしょ」

あ、そういうことか。

「ついてらっしゃい。名和戸氏がお待ちかね

よ」

ということで、(お姉さん+小母さん)÷2は面倒なので、お姉さんにまけとく。お姉さんについてって。噴水のカーテンの向こうにひとりだけ男の人が立ってるのが見えた。あの人かな。

緊張しながら噴水の反対側へ行きかけて。

えええええっ……！！？？？

あたし、棒立ち。だって、目の前の男の人——パパだもの。

まさか。メールを盗み読みして——先に来て名和戸先生を追い返して、あたしにはお説教？

「あ、あの……パパ、温泉旅行に行ったんじゃない？」

パニックってすっとぼける。したら、とんでもない返事が返ってきた。

「よく来たね、ラブ。私が名和戸武智だ」

「え……え、あの……えと、あの……??」

パパ、おっそろしく怖い顔であたしをにらんでる……のかな？ あたしの横では、カブトムシ姫さんとかいう小母さんが、にやにやしてる。

「あの……あの……えと……あの……」

なに、どうなってるの？ パパが名和戸先生？ この女性がマゾ妻さん？ じゃない。女性は偽装家族。偽物の妻で、あたしの偽物の母親役で、でも、目の前の男性は本物のパパで、名和戸先生??

「このまま別れてもいいんだよ。ただし、二度目は無い」

名和戸先生かもしれないパパの声で、あたしは我にかえった。

「実の親子ということに抵抗があるなら、イラマチオもアナルも無しで、純粹なSM調教にしてあげてもいいよ」

うああああ。つまり、本物のパパが本物の名和戸先生で。つまり、実の父親が実の娘をSM調教……と、とととんでもないシチュエーション。

ほんと、回れ右して逃げ出そうとしかけて。はたと、気づいた。

あたし、メール調教のご主人様を選ぶのに、いろんなサイトを見て、名和戸先生なら信頼できるって決めたんだよね。でも、オフ会での調教となると、やっぱ、『全部おまかせしま

す』なんて書いたけど、ちょっぴり不安でもあったんだけど。

パパなら、無茶をされる心配がない！

小っちゃいころは、パパのお嫁さんになりたいなんて思ってた。そりゃまあ、女の子なら一度は通る道かもしれないけど。

パパのお嫁さんじゃなくて、パパのマゾ隷かあ。

そりゃたしかに、近親相姦てのは、よくない……のかな？ 照れくさいてのはあるけど、子供さえできなけりゃ、いいんじゃないかな。古代エジプトだっけ、王様が実の娘と結婚した例もあったよね。子供ができたかどうかはネット検索じゃわかんなかったけど。

パパにだったら、バージンを捧げてもいいかな。

でも、『将来の恋人のため』とかいうけど、実はさすがにパパもSEXまでは抵抗があるんだらうな。

でも、パパ。最初の動画を見たときから、あたしだってわかってたよね。それでも、アナルSEXとイラマチオはOKなんだ。

.....

.....

……決めた！

パパは世界中でいちばん信頼できるご主人様だ。

「メールのとおりで、いいです」

さすがに、声が震えてる。なのに、カブトムシさんがわき腹をこづく。

「聞こえてないわよ」

そうだよね。いさぎよく、はっきりお願いしなくちゃ。

「……メールのとおりで、いいです。うんと厳しく責めて、それからファーストキスもアナナルも奪ってください」

パパの目を見つめて、一気に言い切った。
パパがうなずいた。

「よし、わかった。ついてきなさい」

先に立って、スタスタ歩きだした。

あたしはパパの背中を追いかける。

「あちきたちは、親子でこの街の交通公園に遊びに来たのね」

カブトムシさんが、小さな声で入れ知恵してくれる。

「ラブちゃんは黙ってればいいけど、お節介

なヤカラが感想とか聞いてきたら、ゴーカートなんか怖いだけだし、パレードがないからつまらないって答えなさい。あなたが駄々をこねて、早々に引き上げたって設定だから」

そうこうするうちに着いたのは、結婚式場のあるホテル。ラブホとかじゃなかったんだ。でも、ホテルの部屋って狭いんだよね——てのは、世間知らずの小娘の知識。

おっどろいたあ。ドアを開けてすぐがバスルームとクローゼット。アコーデオンカーテンの向こうが、リビングになってる。余裕で鞭を振り回せる広さ。で、突き当りの3分の2が背丈くらいの壁になってて、奥には2段ベッドが見えてる。

「まずは、ひと息いれよう」

部屋のまん中にあるテーブル（の丸椅子）に、どっかりとパパが座って。その隣にカブトムシさん。あたしは、なんだか手持ち無沙汰できまりが悪い。

「あの……ラブじゃなく、弥愛としてひとつだけ質問していいですか？」

答えはわかってるけど、たしかめときたい。

「なんだね？」

「あの……ママは知らないんですよね？」

「もちろんだ。弥愛は転校した友達の家でお泊り、パパはOB会の温泉旅行だと、ママは信じてる」

ふうう。あたしは、パパに向かい合う位置に座った。なんだか、親子で対話って雰囲気。

「最初に、約束事を決めておこう」

え……？ それって、調教の話だよな。

「プレイを手加減してほしいときは『お慈悲を願います』と言いなさい。言葉づかいは変えてもいいが『お慈悲』だけは、忘れないように。そして、これ以上は耐えられないと思ったときは『お許してください』だ。すぐプレイを中断する」

それって、ネットで見たことある。だけど、あたしはSMプレイをしたいんじゃなくて、厳しい調教を受けたいんだ。それに、あたし、すぐに『お許してください』って言っちゃう自信(?)がある。それに――実の娘だと、パパも手加減しちゃうんじゃないかな。

あたし、顔を上げて、まっすぐにパパの目を見つめた。

「それだったら、針を近づけられただけで、

『お許してください』って言っちゃうと思う。
手加減なんかしないでほしい」

そうか——て感じで、パパがうなずいた。
「わかった。今の言葉は、弥愛としてのもの
だね。ラブは、必ず敬語で話さない」

いっけない。目の前の人はパパじゃなかった。
S 8 0 % + M 7 0 % の名和戸武智先生だ。
「……はい、わかりました。これは、ラブと
しての質問ですけど……ご主人様ってお呼び
したほうが、いいんですか？」

「どういう意味だ？」

「だって……名和戸先生のマゾ妻さんは、先
生のことを『旦那様』ってお呼びするんでし
よ。ふだんのときに、うっかり口走っても不
自然じゃないようにって」

先生の『マゾ妻逆調教日記』に書いてあっ
た。あたしだって——まさか、ママの前で『ご
主人様』とか『名和戸先生』とは呼ばないと思
うけど。

「ラブとしては、どう呼びたいんだね？」

うわ、心を見透かされてる？ 歩きながら、
ずっと考えてたんだ。血のつながった父親に
調教されるなんて、たんに●3歳の処女がマ

ゾ調教されるより、ずっとアブノーマルでスキャンダラスでインモラルだよ。ね。だったら、このシチュエーションを満喫したいな——なんて。

「あの……『お父様』ってお呼びしては、ダメですか？」

そういうの、名和戸先生の小説にあった。パパじゃなくて、ご主人様の名和戸先生、しばらく考えて（迷って？）たけど、うなずいてくれた。

「許す。では——弥愛として、シャワーを浴びてきなさい。バスルームを出た瞬間から、おまえはマゾ奴隷のラブだ。わかったな」

「はい……パパ」

この瞬間は、パパだもんね。でも、かえって照れくさい——のを、舌を出してごまかして、バスルームへ逃げた。

ありゃ。脱衣所がない。目の前は便器とバスタブと洗面台だけ。部屋が豪勢なわりに、しょぼいなあ。

仕方ないので、狭い空間で服を脱いで。きちんとたたんで。下着は服のあいだにはさんで。ちょこっとだけドアを開けて、外の床に

置いた。

「悪いけど、これ、片しといてね、パパ」

これで、明日の朝まで『パパ』は呼び納め。

首から下にざっとシャワーの湯を掛けて。

お股とお尻だけは、指できれいにこすって。

使わなかった小さなタオルで身体を拭いて、

まっさらのバスタオルを胸元から腰まで巻い

て。洗面台の鏡に映ってるあたしの姿、純白

のドレスを着た花嫁さんみたい。

そだよね。これから『お父様』に初縄をい

ただいて初鞭もただいて、そしてアナルバ

ージンを捧げるんだもの。

花嫁てより、生贄かな。なんて考えただけ

で、お股がじとってきちゃう。

大きく深呼吸して。ガチャリとドアを開け

て。絨毯を見つめながら歩いて、ぺたんとお

父様の前に正座。

「ええと……」

恥ずかしいていうか照れくさいけど。きち

んと土下座して、マゾ奴隷のご挨拶。

「ラブは、お父様のマゾ奴隷ですが、初心者

です。どうか、厳しく仕込んでください」

お父様が立ち上がる。お父様はホテルのガ

ウンに着替えてる。

「立て」

言葉に引っ張られたみたいに、すうっと立ち上がった。

お父様の手が、胸元に伸びてきて、バスタオルをつかんだ。

反射的に逃げかけて、意志の力で踏みとどまって（ちょい、おおげさ？）。

一気にバスタオルを剥ぎ取られた。

「……………」

反射的な動作を、また押さえ込んで。手で前を隠したりはしない。

全身が火照ってくる。カブトムシさんのせいだ。

2年くらい前までは一緒にお風呂にはいつてたし、去年の冬も冬至の日だけは2人して柚子湯の1番風呂にはいつてる。今年も一緒にはいるつもりだった。だから、パパに見られるのは平気——てより、嬉しいくらい。

でも、知らない女の人に裸を見られるのは恥ずかしい。

「ほう……」

お父様の手が、お股のすぐ上を撫でた。

「とっくに生えていたはずだな。処理したのか？」

「はい。マゾの心得だと思ったので、除毛クリームでパイパンにしました」

なんか、自慢してるみたいな言い方になった。

「そうか」

部屋のまん中にあったテーブルが壁際に寄せられてて、いろんなSM用具が並べられている。

お父様が、その中から縄束を取り上げた。

うわあ……いよいよ、縛ってもらえるんだ。

「自分では本格的な後ろ手緊縛ができないのが不満だと書いていたな。さっそく、体験させてやろう」

強い力で肩を押さえつけられた。ので、ひざまずく。

両手を後ろに持ってかれて、手首に縄を巻かれた——感激の一瞬。そのまま、手首を吊り上げられる。縄が食い込んでくる。

「くうう……あたし、縛られてる」

手首の縄を引き絞られて、さらに十文字に縄が重ねられる。ギチギチに縛られる心地良

さ——なんてのは、気が早すぎた。おっばいの上に縄を巻かれて、手首をさらに吊り上げられて、おっばいの下も縛られた。

別の縄が首から垂らされて、胸の上下を巻いている縄をV字形に絞られた。さらに脇の下にも縄を通して、前後に引き絞られた。

息苦しくて……頭がポワンとしてきた。

「ああ……きつい……」

縛られてる。あたしの裸が縄で締めつけられてく。そう思うと、お股の奥がジンジン熱くなってくる。

おっばいをつかまれて、縄のあいだから引き出されて、ううう……上げ底Cカップになった。

お父様の指が肌を撫でながら下に滑って。割れ目の中まで侵入してきた。

「きゃあっ……いやああん」

ほんとは嫌じゃないけど、でも恥ずかしい。だって……

「こんなにジュクジュクにしておいて、嫌もあるか」だもの。

痛い……穴にまで指を入れられた。でも、気持ちいい。クリちゃんをコリコリ転がされ

てる。スパークがクリちゃんから腰の奥まで突き抜ける。

「あああっ……ダ、ダメ……」

え……？ お父様ったら、あっさりと手を引いちゃった。

「はふう……」

女の子のダメはOKなんだよ——て、それくらいご存知よね。あたしを焦らして楽しんでる？

「立て」

髪の毛を引っ張られた。

「痛い……」

これは、ほんとに痛くて、被虐感満点。でも、逆らわずに立ち上がった。つぎはなにをされるか、もうワクワクドキドキ、ちょっぴりオドオド。もちろん、キュウウンでジンジン。さすがにジュクジュクまでは無理？

両手で肩とお尻（きゃん♡）を押されて、壁にかかっている大きなドレッサーの前へ。

「どうだ、これが本物の緊縛だ」

素敵……あたしの裸、縄でギチギチに縛られて、肌に縄が食い込んでる。やだ、あたしの顔——恍惚ってる。

「つぎは鞭の味を教えてやる」

部屋を仕切ってる壁(天井まで届いてない)の
のどこへ連れてかれて、後ろ向きに立たされた。
お尻を鞭でぶたれるんだ——と思ってたら、
脇の下に新しい縄を通して、壁の向こう
側へ引っ張られた。ので、後ろ向きに磔。

「自分で乳首に針を突き刺せるメグは、お遊
びのバラ鞭くらいでは満足できないだろう。
とはいえ、いきなり巻き鞭でもかわいそうだ」
ビシッ……鞭の音。

顔をねじって、はなれて斜め後ろに立っ
てるお父様を見たら、1 mくらいの一本鞭を手
に持ってる。アダルトサイトで見ると一本鞭は、
もっと長かった。あれが巻き鞭なんだろう。
短いぶん、こっちのが痛くないのかな。

「……お父様が思うとおりにしてください」

「思う存分に泣き喚かせてやるとも」

お父様の冷酷な声——感情移入しすぎかな。
でも、実の娘だから手加減してくれるなんて
心配(?)は無用だったみたい。

「では、いくぞ」

ヒュッ、ビシイッ！

「う……」

物差しで自分のお尻を叩くのととは比べものにならない、鋭い痛み。でも、じゅうぶんに耐えられる。

ヒュッ、ビシイッ！

「……………」

一発目よか痛かったけど、こっちも打たれるタイミングがわかってきたから、自然と筋肉を引き締めてる。

ヒュッ、ビシイッ！

ヒュッ、ビシイッ！

「なかなか我慢強いな」

なんだか、面白くなさそう。

「あの……やっぱり悲鳴とか出したほうがいいんですか？」

盛大に悲鳴をあげたほうがいいんだろうか。動画とか見てても、バラ鞭で派手に泣き叫ぶ女優さんもいるし、長い一本鞭でお股を叩かれても、ちょびっとしか声を出さない人もいる。

「無理に気分を出す必要はない。いやでも悲鳴をあげるようになるのだから」

シュン、ビチッ！

「きゃああっ！」

お父様って、テレパシー使えるんだらうか。後ろからだけど、お股を叩かれた。お尻の穴を直撃されて、跳ねた鞭の先が割れ目まで食い込んできて、どっちも本気で痛かった。

「わかったね？」

「……はい、わかりました。生意気なことを言って、ごめんなさい」

やっぱ、テレパシーとかじゃなくて、懲らしめのために最大の急所を狙ったんだらう。

「もっと強くケツ穴を鞭打ってやろうか？」

ゾワアッと、恐怖が背中を駆け上った。でも、キーワードなんか決めなくて、ほんとうによかったとも思う。

「お許してください——と言っても、無意味なんですよね？」

シュン、ビチイッ！

「きゃあああっ！」

鞭の音が大きくなったぶんだけ、痛みも大きくなった。

お股へは、その2発だけで、またお尻を叩かれ始めた。

ヒュッ、ビシイッ！

ヒュッ、ビシイッ！

慣れたのか感覚が麻痺してきたのか、痛いけど気持ちいい。Hな気持ち良さじゃなくて、清々しい痛み？

「正面を向け。バストサイズを大きくしてやる」

前言撤回。おっぱいを叩かれるのは、きっと清々しくない。自分で（無意識に手加減して）定規で叩いても、胸をかかえてうずくまっちゃうんだから……怖い。怖いのに、お股の奥が痺れて、乳首がとんがっちゃう。

「はい……」

壁から身体をはなそうとすると、磔の縄で引っ張られる。寝返りをするみたいにして、正面に向き直った。

お父様は鞭をテーブルに戻して、両手であたしの乳首をつまんだ。だけでなく、引き伸ばして、爪まで立てた。

「痛い……です」

「とか言いながら、ピクンピクンと身体が跳ねているぞ」

それは、痛みのせいだってば。

「覚悟はいいな」

お父様が鞭を持ち直して、ビシッとしごい

た。

「いくぞ」

お父様が鞭を水平に振るった。

ヒュッ、バッシイン！

「くうう……」

上げ底Cカップがひしゃげて、目から火花が散るような鋭い痛みが胸に走った。

ヒュッ、バッシイン！

「ぎゃはあっ……！」

もろに乳首を叩かれて、本気の悲鳴。

「どうだ。ケツとは比べものにならない痛さだろう？」

乳首に鞭が押しつけられて、左右にしごかれた。

「い、痛い……」

「おや？ ラブは、痛いのが好きだったんじゃないのか」

「そんなこと、メールに書いてません」と、思う。

「しかし、顔に書いてあるぞ」

否定はできない。こんなに痛いつてのに、お股の奥の熱い痺れは、そのままのもの。

「……お父様の意地悪」

甘えた声になっちゃった。これって、鞭をおねだりしてるように聞こえるかな。

「俺は意地悪ではないぞ。ラブの希望どおり、たっぷりと鞭をくれてやる」

ように聞こえたんだ。

お父様が後ろに下がって、鞭を構える。

「いくぞ」

ヒュッ、バッシイン！

「ぎひっ……！」

また、乳首を直撃された。でも、ある程度は覚悟してたから、最初ほど大げさな悲鳴にはならなかった。

ヒュッ、バッシイン！

「……………」

おっぱいの膨らみくらいじゃ、もう悲鳴はあげない。

ヒュッ、バッシイン！

ヒュッ、バッシイン！

ヒュッ、バッシイン！

「きひいい……」

狙いがはずれてるのか、わざとはずしてるのかはわからないけど、乳首直撃は3発に1発くらい。

お父様は鞭打つ手を休めて、大きなクッションを持ってきた。

「足を開いて、腰を突き出せ」

ひえええ（なんてふざけてる余裕が、実はあるけど）……でも、顔から血の気が引いたのも事実だと思う。自分では見えないけど。

後ろから鞭の先が当たっただけで、あの痛さ。正面から叩かれたら……心臓がすくみあがってるのに、もっと奥のほうで得体の知れない感情がうごめいてる。そして、お股の中は、ジュクジュクしてきた。

「怖いです……」

てのは、自分へのごまかしかな。足をグッと開いてお尻を壁から浮かせた。

腰の後ろにクッションが押し込まれる。

「これから何をされるか、わかっているか？」

「はい。ラブのお股を……鞭で叩くんですね」

あたしの声、震えてる。やっぱり、怖い。

「すこし違うな。俺が鞭を叩き込むのは股ではなく、メコ筋だ。割れ目、オマ●コ、どう言ってもいいがな」

ううう……強調しなくて、いい。本気で怖くなってくる。今までの嘘気だったわけじゃ

ないけど。

お父様が、すっと後ろに下がって、鞭をだらんと垂らした。

無造作に腕を振り上げて――

シュ……パシ！

「きゃああっ……」

クリちゃんを直撃。反射的に腰が逃げて、そのぶん脇の下に縄が食い込んだ。

「これからが本番だぞ」

さっきより激しい勢いで腕が跳ね上がって、細長い影がお股に向かって走って――

シュウツ、ビッチイン！

「ぎゃはあああーっ！」

さっきとは桁違いの――お股を切り裂かれるような、鋭くて熱い激痛。

「あうううう……」

膝が碎けて、足の裏はちゃんと床についてるけど、体重は脇の下の縄が支えてる。

輪ゴムふんどしを引っ張ってメコ筋にパッチンしたとき、超激痛だと思ったけど――訂正する。あんなの、ちょっと乱暴な愛撫にしか過ぎない。それくらい、鞭のメコ筋打ちは凄まじく激烈に痛い！

「ふわあ……残酷」

カブトムシさんの呆れたような声。そうだった、この人、ずっと見てたんだ。あれ……見てただけじゃなくて、こっちにスマホを向けてなかった？

「今は激痛に悶えているだけで、快感など感じていない」

まあ、いいか。お父様には顔出しの動画をたくさん送ってるんだし。

「しかし、明後日の夜あたりは、今日のことを思い出しながらオナニーに耽るだろうね」

なんか、すごいこと言われてる。たぶん当たってるから、悔しくて恥ずかしい。

「さて、あと2発ばかりメコ筋縦打ちを食らわせてやるが、覚悟はいいな？」

あの激痛が、あと2発。これまでの経験からすると、最初の1発よか、その次のがずっと厳しい。あたし、絶対に耐えられない。

「お願いがあります」

「言ってみろ」

「さっきみたいに大声で叫んでたら、喉がつぶれてしまいます。サルグツワを咬ませてください」

それも理由だけど。悲鳴も哀願も封じられて限界以上に責められるってのに、ずっと懂れてたし。あまり大声を出すと、隣にまで聞こえるんじゃないかと心配になってきた。

お父様ったら、テーブルの上にあたしのショーツだけ別に置いている。それを丸めて、あたしの口に押しつけた。

「これをくわえろ」

あたし、こういうのに懂れてるって、メールに書いた覚えはない。でも、名和戸先生の小説ではしょっちゅうだから——あたしのほうが、先生に感化されちゃってるんだ。

だとしたら。嬉しそうに口を開けたりしちやダメだよな。

あたしはお父様をにらみつけて、口を真一文字に閉じた。

「逆らうのか？」

おっぱいをつかまれて、思いきりひねられた。

「い、いた……」

（わざと）不用心に口を開けたところに、すかさずショーツを突っ込まれた。

「吐き出すんじゃないぞ。つぎは、もっと痛

い目にあわすからな」

お父様はタオルまで持ってきて、それで結び玉を作って、ショーツの上から押し込んだ。タオルが頭の後ろで結ばれて、どうあがいてもサルグツワをはずせなくされた。

「おお、ううう、うううおう……」

これ、息が詰まりそう——と言ったつもり。

「では、メコ筋打ちの再開だ」

お父様の声、はずんでない？

実の娘なんて関係なく、SM初心者の少女をハードに調教してるんだ。

最初から一本鞭でメコ筋打ち（きゃ、恥ずかしい）だなんて、ひどすぎる。でも、その過激で残酷な責めにあたしなら耐えられると思ってくれてるんだろう。

それなら、ちゃんと期待に応えなくちゃ。

あたしは目を閉じて足を踏ん張り、グッと腰を突き出した。

シュウッ、ビッチイン！

お股から脳天まで衝撃が突き抜けた。

「おおっ、あゝあゝっ……！」

激痛に揺すぶられて、腰が跳ねる。でも、ちゃんと足は踏ん張ったまま。なのが、いけ

なかった（よかった？）。

お父様は思いきり腕を後ろに引いて、渾身の力で鞭を振るった。

シュウウツ、ビッチイイン！

「お`お`お`ーっ……！」

あたしはのけぞった姿勢で固まって、その直後に膝が砕けた。脇の下に縄が食い込む。

「これで体験コースは終わりだ。よく頑張ったな」

お父様が優しくいたわってくれた。それから、心臓が喉元までせりあがるような、冷酷な言葉。

「しかし、本番の調教には耐えられるかな」

この鞭打ち、絶対に初心者向けじゃない。なのに、体験コースに過ぎないなんて。

「ラブは、まだ命令の7と8を実行していなかったな。俺とヒメとで、強制的にクリアさせてやる」

宙ぶらりんになったままの膝が、ガクガク震え出した。でも———そうか、カブトムシじゃなくて、カブトヒメさんだっけ。なんて考える余裕があったりする。だもんだから、命令7と8の内容もきっちり思い出してしまっ

た。

7は、乳首とクリちゃんに針を十文字。そこで挫折しちゃったのに。8は、タコ糸で根元を縛って、ピンクローターを吊るして、それから十文字の針。

膝だけじゃなく顎もわなないてる。サルグツワがなかったら、歯を鳴らしてる。

あたしは、いったんテーブルの上を下ろされて、足を逆海老に曲げられて縛られた。腰にも別の縄が巻かれる。

最初から脇の下に通されてたのと合わせて3組の縄が、背の高さで途切れてる壁の向こうに垂らされた。

「ヒメ、向こうで全部の縄を引っ張ってくれ」

お父様の手が、お股とおっぱいの下に差し込まれて。

「よいしょっと……」

あたしは水平に持ち上げられた。壁の向こう側で縄がどこかに結びつけられて、あたしは宙吊り。足首を交差して縛られてるから、引っ張られると自然に開脚しちゃう。

「命令1から3まで一日のうちに試みたり、4と5をチャンポンにしたラブだ。一気に命

令8をクリアさせてやる。どんなに痛くて我慢できなくても、縛られて声まで封じられていては、クリアするしかあるまい」

お父様が恐ろしいことを言う。

なのに。お股を探られて、穴にまで指を入れられて。グジュグジュになってるのが、ばれてしまった。厳しい責めを期待して興奮していると思われても仕方がない状況。

「まずは、タコ糸だ」

乳首をつまんで引き伸ばされながら、根元をきつく縛られた。クリちゃんも同じにされたけど、こっちは皮の上からだから、そんなに痛くも快感もない。

「んゝんんんゝ……」

こんなにひどい目にあわされてる。ううん、もっとずっとひどいことをされるんだ——そう思うだけで、頭に霧がかかったみたいになっちゃう。

乳首とクリちゃんを縛っている3本のタコ糸が結び合わされて——そこに（ピンクローターじゃなくて！）電マが吊るされた。

「むいゝいゝいゝいゝっ……！」

今にも千切れそうな、凄まじい激痛。

電マって、けっこう重いんだよ。それを敏感な突起に吊るすなんて、無茶——でも、ないかも。エロ画像でたまに見かける。

ブブブブブブ……

いきなり電マが動きだした。振動があたしの突起に伝わって——凄まじい激痛が、超絶の激痛までレベルアップした。

「む`う`う`う`う、う`ま`っ……！」

全身が、ビクンビクン——痙攣しっぱなし。電マで刺激されてるのに、快感なんて、ちっともない。痛い、痛い痛い——それだけ。

あ、電マが止まった。

「お楽しみ中のところ、すまないがね」

楽しんでないってば！

「いよいよ、針の出番だからね」

目の前にかざされたのは、マチ針ではなくて注射器の針。

顔が引きつった。お父様は、とんでもないサディストだ。マチ針で降参したのに、その何倍も痛い注射針だなんて、ひどすぎる。

「では、1本目」

伸びきっている乳首をさらに引き伸ばされて、瞬間的な鋭い激痛が突き抜けた……んだ

けど。

「んんっ……？」

マチ針より痛くなかった。腕に注射針をチクッと刺されたときの痛みの、せいぜい10倍くらい。

2本目が乳首を貫いたときは、最初の注射針とこすれて、そっちの痛みのほうが強かったくらい。

ほんものの調教を受けて、いつものSM遊びとは桁違いに興奮しちゃってるせいかな。なんだっけ……脳内麻薬？

なんてことを考えてるうちに、左右の乳首に注射針が十文字に突き刺さってしまった。

「さあ、自分ではどうしてもできなかった、クリトリスへの針刺しだぞ。どんなに痛くても逃げられない。覚悟をしろよ」

そうだった。いわば、これからが本番だ。いくら脳内麻薬でも、これは耐えられないと思う。でも、お父様の言うとおりに。逃げられない。怖くて、目を開けてられない。

チョンッてクリちゃんを針先でつつかれただけで、ビクッと震えあがってしまう。つぎの瞬間、鋭い痛みがお股を貫いた。

「んんんーっ！」

でも、自分で乳首を突き刺したときほどの痛みもない。なんだ、こんなものかって、拍子抜けしちゃった。

「んんんっ……」

2本目は、もう悲鳴じゃなくて呻き声だけ。「これで命令8をクリアできたな。褒美をやるう」

電マのコードが胸を縛ってる縄に結びつけられて、あたしの敏感な突起にかかっている重みが、ずっと軽くなった。

ブブブブブブブ……

電マのスイッチが入れられて――針で刺されてる痛みも加わったのに、快感のほうが強いくらい。ていうか、電マの振動はピンクローターとは比べものにならない。

「んんん……むううっ、ううう……」

悲鳴でも呻きでもなくて。喘いじゃってるよ、あたし。

お父様とカブトヒメさんが壁の向こう側へ姿を消して、プチ放置プレイ。

「ぶむう、んん、んんん……」

なんてのかな。無茶苦茶に痛いんだけど、

その上に気持ちいいのがおおいかぶさって、それがどんどん積み上がってくみたい。

「んふっ……ふぶう、んっ……」

痛みまでが、だんだん快感に織り込まれてく。つまり。これが……マゾの快感、悦虐なんだと思う。だけど、こんなの——自分でできるかっていうと、絶対に無理。

もしかすると、お父様の調教だから、安心して苦痛に悶えてられるんじゃないかな。もっとひどいことはされるかもしれないけど、ほんとに危険なことはされないっていう、絶対の信頼。

そう思うと……お父様にこそ、バージンを捧げたいと思ってしまう。

あっ、思い出した。まだファーストキスも捧げてない。まだまだ調教は始まったばかりなんだ。アナルSEXとかイラマチオとか、あたしを待ち受けている厳しい素敵なSEX調教のことを考えちゃうと……針を刺された乳首がズキンズキンうずいて、クリちゃんもビクンビクンって、ますます固くなっちゃって、股の奥——じゃなかった、オマ●コの中が、熱くてネバネバしたHなお汁でグチョグ

チョになっちゃう。ダメ……ダメじゃないけど。

「うう、ううっ……ううあうあうーっ！」

これまでに経験したどんなアクメよりも大きな波に飲み込まれて、放り投げ上げられて……ううう、まだ電マが動いてる。絶頂のさらに上へと押し上げられてく。

「これまた、盛大に濡らしたものだな」

不意に、耳元でお父様の声。オマ●コを指で搔きまわされてる。

「うう……ううう……」

まったく新しい部分への乱暴な刺激、違う快感。自然と腰がくねっちゃう。サルグツワされてなかったら、指でいいから処女膜を突き破ってほしいって、お願いしてると思う。

「ヒメも調教に加わってくれるそうさ」

えっ……？

すうっと興奮が冷めた。やだよ、そんなの。なにもかもお父様に捧げて、お父様に虐められたいのに。赤の他人なんか、やだよ。

「もちろん、ラブのすべては俺のものだ」

やっぱり、お父様はテレパシーだ。それとも、ベテランのサディストだから、マゾの初

心者のことくらい、お見通しかな。

でも、もしも、どっちも違ってて。実の娘だから、こんなにもわかってくれてるんだとしたら、嬉しいな。

「ヒメは俺の手とペニスがふさがっているときの、三本目の手だ」

そっか。そんなふうに考えれば……ちっとも嫌じゃなくなった。お父様が使う、生きてるアイテム？

「ヒメがシャワーを使っているあいだ、何度でも逝っておけ」

お父様が、また壁の向こう側に姿を消して。あたしは、ご命令どおり、アクメることに全神経を注いだ。

でも、その前にカブトヒメさんが目の前に立った。いつの間にか、ビキニ水着に着替えてる。花柄の、わりとおとなしめのやつ。

「では、第2ラウンドの開始といくか。メールで約束していた褒美だ」

お父様も戻ってきて、無慈悲にも電マを止めてしまった。

電マが取り去られて、乳首もクリちゃんも生き返った。針を抜いてくれて、タコ糸もほ

どいてくれて、傷薬も塗ってくれた。すこしだけ残ってた痛みも、すうっと消えていった。

床に下ろされて、サルグツワもおしまい。でも、縛られたままなのが嬉しい。

「こんなに痛くて、こんなに感じたのは、初めてです。ありがとうございます」

きちんと、お礼を言った。もっともっと虐めてください——という願いをこめて。

「では、生まれて初めての苦しみも味わわせてやろう」

ふうん。痛いのと苦しいのとは違うんだ。

バスルームに連れてかれて、洗面台の前にひざまずかされた。

お父様は洗面器にお湯を入れて、ガラス瓶の中のドロツとした液体と混ぜ合わせた。テストが良くできたご褒美は浣腸だから、これがそうだよね。

つぎにお父様が部屋から持ってきたのは、細長いゴムチューブ。先端が丸くなって、小さな穴が開いてる——のは、わかるんだけど、途中で小さいけど分厚い矢羽根みたいのが二か所あるのは、なんだろう。

「これが何かわかるか？」

「カテーテル、ですか？」

ちょっと自信がない。ゴムチューブの根元側にゴム球が二つあるのも、奇妙だ。

お父様は色の違う洗面器に水を貯めて、その中にゴム球を沈めた。ゴム球をぎゅっぎゅっ握ると、矢羽根がだんだん膨らんで丸くなってく。

「先端のバルーンだけ腸に入れてから膨らませば抜けなくなるし、ふたつのバルーンがアヌスの内と外でおしくらまんじゅうをして、隙間から排泄することもできない」

アナル処女だもの、太いプラグは無理だもんね。

「覚悟はいいな。後ろ向きになって、洗面台に肩を乗せろ」

自分から被虐のポーズをとるなんて、あたし、そんなマゾ娘じゃない——てことにしよう。

「そんなの、覚悟できません！」

隣の部屋に聞こえないくらいの声で抗議した。それから、しんみりをつけ加える。

「覚悟できてなくても、許してはもらえないんですよね？」

お父様が、ニヤリと笑った。

「そういうことだ。ヒメ、すまないが、こいつを押さえつけてくれ。俺みたいに、乳房を引っ張ってやれ」

「そんなの、かわいそう。垂れパイになっちゃう。言うことをきかせればいいのよね？」

カブトヒメさんが、あたしの横に並んで。肩をつかんで逃げられないようにしてから、クリちゃんを指の間に挟んで皮を剥いて、思っし爪を立てた。

「いやあ！ つねらないで」

隣の部屋に筒抜けなくらいの大声になった。

「言葉づかいがなっていないわよ。マゾ奴隷は、常に敬語を使うこと。あ、そうそう。あちきのは『お姉様』って呼んでね」

「わかりました。おとなしくしますから、クリちゃんは虐めないでください——お姉様」

クリちゃんをつまんだままだけど、爪は許してくれた。

あたしはクリちゃんを引っ張られて洗面台に向き直った。観念して、縁に胸をもたせかける。

お父様にお尻を左右に割られて。ひと呼吸

があってから、カテーテルが押し入ってくる。自分でマドラーを突っ込むほども痛くない。むしろ、ぬらぬらした感触がくすぐったぽい快感だったりして。

あたしの腸の中と外で、2つのバルーンが膨らみ始めた——けど、思ったより圧迫感は小さい。こんなのでストッパーになるのかなって、そっちを不安に思っちゃう。

私から見える位置に動いて、お父様が巨大な注射器に浣腸液を吸い込んだ。

「では、褒美をやるぞ」

カテーテルに注射器がつながれて——生ぬるい液体が、じわじわとお腹にはいってくる。

あたし、浣腸されてるんだ。SM遊びで、一度だけイチヂク浣腸をしたことがあるけど。我慢できなくて、5分くらいで降参しちゃった。今日は、イチヂク浣腸の5倍もの量。オトナでも、最初は100mlで苦しむなんて脅かされて。こんな栓までされたんだから、5分や10分じゃ許してもらえないよね。なんてこと考えてるうちにも、じわじわとお腹が張ってくる。

「あああ……お腹にはいってくる」

口に出して言ってみると、キュウウンって、胸が切なくなっちゃう。

お父様が立ち上がった。てことは、注入完了。

「ふうん。200ml入れても、ちっともわからないのね」

カブトヒメさんが、つまらなさそうに言う。「1Lくらいは注入しないと、腹が膨らんだようには見えないからね」

「てことは、ロングスカートを穿かせれば、このまま外に連れ出せるかしら」

「いやあ！」

冗談！ 今現在でも、もうお腹が苦しくなってきたるってのに。

「お父様、お姉様の提案は却下してください」

まさかとは思うけど、いちおう、きちんとお願いしとく。

「もちろん、そんな恥ずかしくてつらい目には合わせない。チェックインのときまで、ラブは部屋から一步も出さない」

お父様が請け合ってくれてホッとした——のだけど。

「おや、もう午後6時を過ぎている。ヒメ、

食事に行こう」

「ラブちゃんは？」

「放置プレイというやつだね」

本気のひええええ、だよ。ご飯食べてくるって、30分じゃ戻ってこないよね。それまで我慢でき……なくても、自分じゃどうにもできない。

胸が（切ないんじゃないなくて）ねじ切れそうな不安に襲われる。

そんなことにはお構いなく、あたしは部屋へ連れ戻されて、床にあぐら座りさせられた。ていうか、足は組まなくて。足の裏で電マを挟んだ形で縛られた。膝を深く曲げられて、縄でその形に固定された。

電マの丸い首の部分が、お股に乗つけられた。コードが手首に巻きついて、スイッチを握らされた。

「使いたければ、好きなだけ使っていいぞ」

つまり、お腹が苦しくなったら（もうなってる！）電マでオナニーして気をまぎらわせるってことだと思う。もちろん、すぐに使ったりはしないもん。

「お父様の意地悪……」

甘え気分で文句を言ったら、恐ろしい言葉が返ってきた。

「意地悪なだけじゃないぞ。俺は無慈悲で残酷でもある」

——お父様とカブトヒメお姉さんは、わざとゆっくり服を着替えてる。その間にも、お腹がどンドン張ってきて、今すぐトイレに駆け込みたい。でも、あたしにできることは。

「お願いですから、できるだけ早く帰ってきてください」

部屋から出ていこうとする2人の背中に、あわれっぽいお願いをするだけ。なのに、2人とも、あたしを振り返ってもくれなかった。